

場所がキーワードになった2つの作品

夏 池 篤

場所がキーワードとなった作品

夏池 篤

はじめに

作品を制作するにあたって、そのテーマは作家自身のライフワークとして内発的に発生するケースと他の環境諸要素を中心にタイムリーに形成される場合がある。近年において筆者が経験した展覧会では、その場所性に触発されることにより、作品の内容が決定することで、日頃長期的な視点から考えて制作している作品以上に、明確なメッセージを持って作品作りをすることができた。明確なメッセージを持って、論理的・合理的に内容が表現されること自体が、美術表現にとって必ずしもよい作品につながるとは限らない。しかし自分の表現におけるアイデアやひらめきがその場の具体性と結びつくことで、作品が説得力を持ってくる時、自分の表現方法に少なからず確信を持つことができる。またそのことから作品の展開に広がり生まれ、日頃の長期的視点による制作では、限定して考えがちな表現方法や素材に新しい展開が生じ、感性を活性化した状態で制作に臨むことができた。このような経験をすることのできた展覧会、ワークショップによる作品を紹介しながら、立体表現における作品と場所の関係について、その可能性を考えてみたい。

1. 芝山野外アート展 '99 から

1999 年の春、5 月 2 日～ 30 日まで千葉県の成田空港から 15 分ほどの所の芝山仁王尊観音教寺及びその周辺地域で開催された「第 3 回芝山野外アート展 '99」に参加した時の作品がその一つである。

この美術展は実行委員による企画展で、芝山という土地の特性を背景に展開されてきた。その年のパンフレットから呼びかけの言葉の一部を引用すると『芝山の地は、文化・宗教・政治経済などの歴史的な重なりを、独特な断層面として眺望できるフィールドであり、人はそこにかかわりを持った時、図らずも回避していた自分の生存の原型を見る可能性を持つ。そして、太陽・土・空気・水・動植物などと人間の風景が、アートを通してより鮮明になり、さまざまな「かかわりの原型」として反映される場となるであろう。』とある。

各実行委員による「かかわりのイメージ」に沿って、個人的に、あるいはいくつかのギャラリーの協力を得ながら作家との交渉がなされたようだ。筆者には前年の都内での個展を見た実行委員より参加の呼びかけがあっ

た。突然の電話があった時は一瞬とまどったが、「成田空港近くで真上をジャンボジェットが飛び交う場所」という説明を聞き、参加を承諾した。私は現在金谷町という静岡県の中でも旧東海道筋の古い町の面影の残る所に住んでおり、この静かな町にも空港ができようとしている。この時私の頭の中には、未来の金谷町が芝山にはあるのではないかという気がして、是非見てみたいと思ったからだ。

開催の前年の秋に現場見学会が企画され出かけた。ジャンボジェットが 10 分おきに頭上を通過する。否応なしに会話は中断される。これがこの町の毎日の生活であるのかと思うとぞっとしてきた。（そこに暮らす人達には申し訳ないが）

作品設置の候補地を探すために周辺の地域を案内された。ほとんどの候補地を回り、もう夕暮れも近づいた頃、ススキの生い茂った広場に出た。そこには赤トンボが群れをなして飛んでいた。子供の頃田舎で追いかけた赤トンボのことを思い出し物思いにふけっているとまたジャンボジェットが轟音をたてて頭上を通り過ぎた。この瞬間に、作品のコンセプトは決定された。作品は少なからず社会的問題を含んだものとなったので、説明だけが先行した作品にならないようユーモアを交え広がり柔軟性のあるものとした。

設置場所は野外の広々とした空間であったので、作品はある程度のスケールの大きさを必要とした。上部の布、鉄棒、プロペラの部分は自宅で作した。最初布の部分は、ネットを使用する予定であった。しかし、何度かシミュレーションを行う中で、思ったように風を捕らえることができず、当初のイメージと違い視覚的なインパクトも弱いことから素材を布に変更した。残りの部分は図面上で検討し、マケットを制作することで確認することにとどめ、後は現地での制作とした。学生 1 名に制作助手を依頼し、4 日間現地での制作設置作業を行った。

竹を現地の山から伐りだす許可をもらうことから始まり、制作途中の住民との会話、お寺の本堂脇での寝泊まりは、現地の状況を最小限ではあるが把握、理解する手助けとなった。

設置場所は、周りが林に囲まれ時々ウグイスの鳴き声が聞こえる広場で、真上をジャンボジェットが機体に書かれた文字が読めるほどの大きさで通過する、作品にとっては絶好の所であった。地盤は想像していたより堅く、6 m 近くある竹を地面に垂直に固定するのに予定以上の時間を費やした。作品は長い部分で 8 m、短い部分でも 4 m あるので全体の形を把握しながら竹を編んでいくのが難しい。できるだけ幾何学的、装飾的になるのを避け有機的なフォルムになるよう心がけた。上部の布製のネットは刻々と変わる風の方向に十分対応しきれない部分もあったが、1 ヶ月の展示期間中台風の到来が

題名：「赤トンボ」

大きさ：h600 × w300 × d400cm

素材：竹、布、鉄棒、プロペラ

設置場所：芝山仁王尊観音教寺広場

設置期間：1999年5月2日～5月30日



「赤トンボ」全体風景



「赤トンボ」内部より空を眺める



あったにもかかわらず、一部プロペラが飛ばされた程度で済んだ。仮設の野外作品の強度としては許容範囲に入るものであったのではないか。

この展覧会では、野外作品に加え本堂隣の芝山ミュージアム内のギャラリーで出品作家紹介とエスキース展が平行して開催され、期間中には出品作家のひとりである大川和宏講師によるお餅を粘土の代わりに使って焼いたワークショップ「やきもちの自由」と千葉大学教育学部ワークショップ研究グループによる地域の子供達を対象にしたワークショップ「芝山クエストⅡ（ワクワ克蘭ド）」が開催された。また作家と語る会や期間中を通して実施されたアートガイドツアーが関連プログラムとして企画されており、鑑賞者への十分な配慮がなされた展覧会となっていた。記録集も発行されているので参考にしたい。

2.「木の造形ワークショップ」による共同作品

2000年夏、秋野不矩美術館での個展の企画の一つとして「木の造形ワークショップ」が開催された。これは筆者が作品のイメージを出し、ワークショップにより住民と共同で制作・展示を行ったものである。この企画に関して主催者側との話し合いの中で決まったことは講演とワークショップにより住民にアートを還元すること、天竜市は木の産地であるので木を用いたワークショップであること、出来上がった作品は個展会期中美術館前庭に展示すること等であった。

当初天竜市民に木を素材とした手持ちの品を持ち寄ってもらい、それによって立体作品を構成することを考えていた。しかし美術館の下見をした時点で考えは変わった。この美術館は町から山に入った所の少し小高い丘の上にあり、周辺は静かな森に囲まれている。元森であった場所を切り開いたこの美術館の前庭には、人間だけではなく周辺の森に住む動物も意識した作品を置くことにした。昼間は人間が美術作品として鑑賞し、夜は動物が遊びに山からやってくる遊園地というイメージである。作品の題名は「森のジェットコースター」これがこの作品の生まれるきっかけである。ジェットコースターという発想はそもそも人間的発想ではあるが、レール部分は木の枝でできており、人間が乗り込む箱の部分はない。出来上がったコースは美術館の前庭を縦横に交差しながら螺旋状に渦巻き高さ3m、縦25m、横15mあり、先端は森の中まで延長した。美術作品は人間を対象に制作されたものであるが、人間以外のものへの視点が美術作品の中にもっとあってもよいのではないかと考えた。日頃はアルミニウムを素材としながら、地球環境における人間の行為を作品化したものが多い。今回のような作品を作るきっかけとなったのは、その場所性から来るも

のが大きかった。予期せぬ前提は、今まで自分では持ち得なかった視点を与えてくれた。

制作と展示にはワークショップ形式で2日を予定した。初日は天竜林業高校の敷地をお借りした。あらかじめ枝打ちされた枝や雑木の切り倒されたものを残しておくよう天竜市の木材関係者をお願いしておき、それを使って制作に取りかかった。

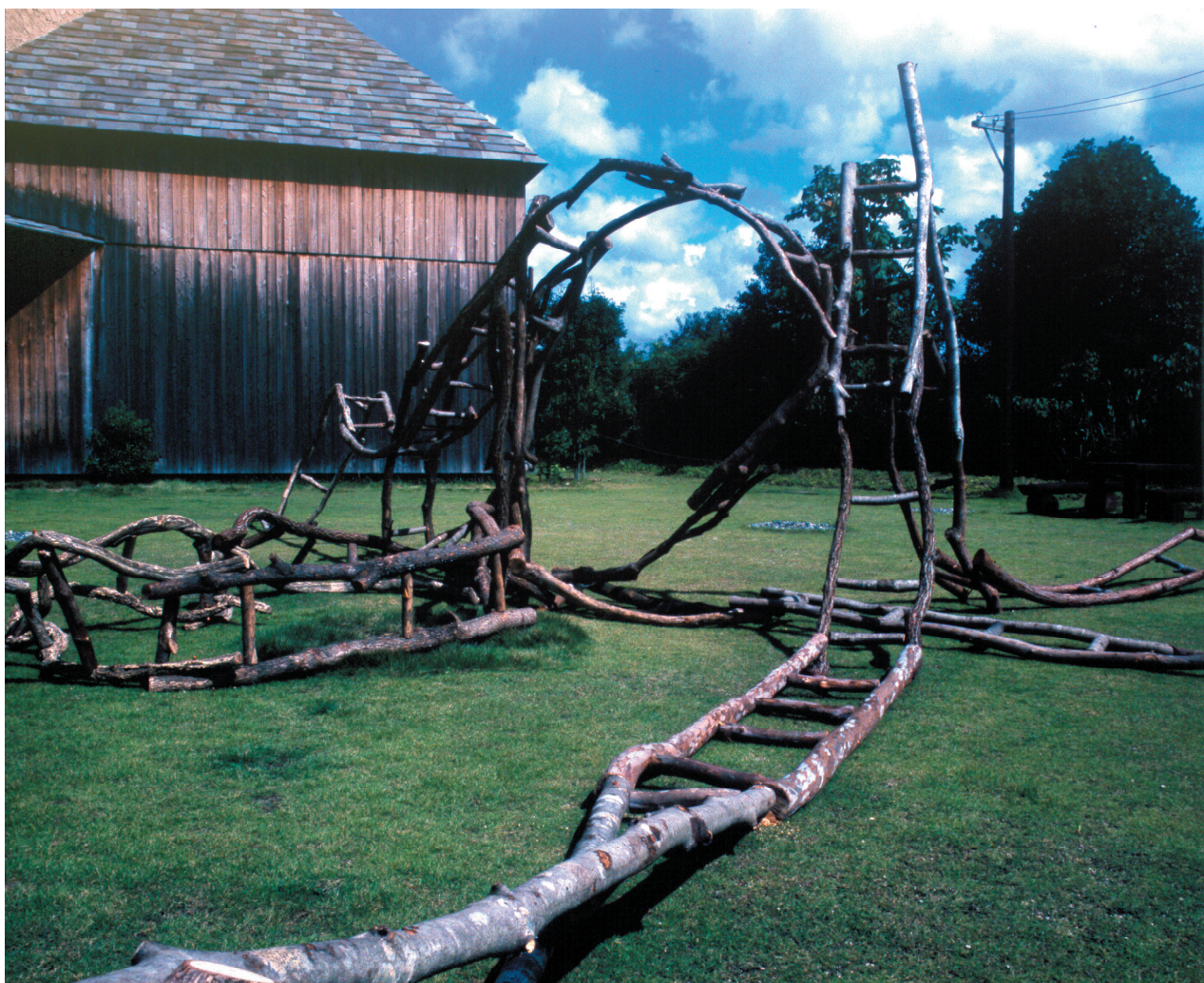
作品は木の素材の持つ特性が共同制作者であるワークショップ参加者のイメージをふくらませ、制作現場での対応が作品に反映されることを念頭に置いた内容とした。

制作にあたって木の加工は参加者ができるだけ少ない道具で簡単に作ることができることを前提とし、木にドリルで穴を開け、ダボ（直径12mm*長さ110mm）で木と木を留めるだけで基本形態であるレール状の形が組み立てられるこの作品とした。このことは、作品を作る上で技術上の問題にばかり意識が向いてしまい易い初心者には、造形的な側面への興味を喚起させるに都合が良かった。

ワークショップを始めるにあたって、他の地域でのワークショップであれば、主催者側が道具の使い方から細かく教えなければならなかっただろう。しかし木の町天竜市のワークショップは参加者の質が違っていった。簡単な道具の使い方、作品のイメージと制作方法の概要の説明だけでほとんどの人が制作に取りかかることができた。これはワークショップが開催される場合、参加対象者の年齢、性別、美術表現に対する理解度等に加え地域性について配慮することで、より有意義で特徴ある内容になることの現れである。また、地域性と一概にいても、開催される場所（山・川・海に近い等）、使用する素材に関するもの、その土地の産業に関係するもの等いくつかの要素があるので、有効なものをいかに効果的に取り入れるかが内容の充実を左右するのではないか。

ワークショップ2日目、梯子状のパーツにまで組み立てられた作品を、トラックで美術館前庭に運び、組み立て展示の作業に取りかかった。初日のワークショップでは、始めるにあたって展示の状態をイメージしたものの、集められていた木の形はすでに決まっており、制作の時点では目の前にある木の形に対応しながら組み立てるのがやっとであった。このような状態の中で展示は困難が予想されたが、当初イメージしていたものと近いものとなった。美術館の前庭での仮設置であったため、安全上の配慮から垂直方向への構成は縮小せざるを得なかった。ワークショップの期間がもう少し長く、集められた木材の量が多ければ、もっとパワフルな作品になったであろうところが惜しまれる。

制作と指導を手伝ってくれた5名の卒業生と学生を含め延べ約40名の参加者があった。



ワークショップ制作風景
(天竜林業高校にて)
2000年8月27日

題名：「森のジェットコースター」
大きさ：h300 × w2300 × d2000cm
素材：木
設置場所：秋野不矩美術館前庭
設置期間：2000年9月3日～17日

森から作品を眺める



ワークショップ作品展示風景
(秋野不矩美術館前庭にて)
2000年9月3日



3. ラチャパット・インスティテュートでの交流展

2002年8月9日から8月31日まで、タイのバンコクにあるラチャパット・インスティテュートで常葉学園大学造形学部教員と菊川高校教員による美術デザイン展が大学間交流のさきがけとして開催された。この展覧会に筆者も出品し現地で作品の設置をおこなったので、この体験から作品と場所性ということについて触れたい。

立体作品の海外での発表の場合、最も問題になるのが作品や材料の運搬の問題である。国を挙げての国際展やスポンサーによるバックアップのある展覧会と違い、自前で作品の運搬から設置までおこなわなければならない状況にあって、国内の展覧会に出品するのと同様の規模や内容でこの展覧会に参加することは難しかった。そこで、むしろ状況の違う海外であるからこそ作品が意味を持ってくる内容にするべきではないかと考えは変わった。1998年制作の「領海」という作品のコンセプトをベースにインターネットのテレビ会議システムを使ってあらゆる国の人が参加できる作品を考えた。もう少し具体的に説明すると作品「領海」は、アルミニウムの鋳造による本体に水を内包させ、連通管の原理を使ってそこにプラモデルの軍艦を浮かべたものである。作品群全体の大きさは高さ170cm 幅600cm 奥行400cmで、海で繋がっている世界の国と国の関係を象徴的に作品化したものであった。

今回は世界地図を印刷したプラスチックの容器に水を満たしたものの5つをビニールパイプで繋ぎレベルを揃えた水面に、プラモデルの軍艦、子供の風呂用玩具、生きた魚を入れた。これは、国際間の政治・経済、子供の世界、生態系の問題等を暗示したものである。これにコンピューターのモニターが加わり、インターネットのテレビ会議システムを使った世界中からの参加者の映像がモニターを通して、ラチャパットギャラリーの作品の水面と同一のレベルで揃うよう並べられる”wwwwater project”を計画した。

インターネットのテレビ会議システムの持つ地球規模で空間を飛び越えてしまうインタラクティブな双方向性には早くから興味を持っており、この機能を作品に取り入れることの可能性について以前から考えていた。ソフトウェアは、WINDOWSとマッキントシュ共通のプラットフォームを持つフリーソフトウェアのivisitというEyematic Interfaces社の会議システムを利用した。このサイトでは無料で利用できるサーバーが立てられており、そこにミーティングのための“部屋”を作ることができる。今回はserverの下にArts/Sculpture/thai_exhibitionという階層構造で”thai_exhibition”という部屋を準備した。ただし無料での利用の場合は、最

大利用人数は10人で、数日その部屋の利用者がいないと削除される。

参加者への呼びかけの方法として、筆者のホームページにこのプロジェクトのサイトをもうけ、参加の呼びかけとその内容を掲載した。またivisitのインストールと参加の方法を掲載した。

以下に呼びかけ文を筆者のホームページから引用する。『私はタイでの展覧会で一つのプロジェクトを計画しています。それは世界中の人々にテーブルの上で水を張った容器にものを浮かべてもらい、この映像をインターネットにより世界中の人々が互いに共有するというプロジェクトです。

このプロジェクトは、私の1998年の作品、領海<the territorial waters>が原型になっており、それをインターネットを使って世界に展開したものであります。そして、この作品はタイでの私のインスタレーションに世界中から参加して下さる皆さんの水面の映像を加えることで成り立ち、更に増殖していきます。海が世界の国と繋がっているように、世界の人達が自分のプライベートな海(自分で準備した容器の水面)をインターネットの映像を通じ世界に繋げていくことにおいて、国家、民族、個の差異を確認すると同時に共有、共存、共生の可能性を模索するものになればと考えております。』(英訳は省略)

海外に在住する知人と本学の一部の学生には、このプロジェクトを紹介し参加を呼びかけた。またivisitのテレビ会議のサイトでこの部屋を訪れた人には、このプロジェクトの期間と内容を知らせるアナウンステキストが自動的に流れるようにした。

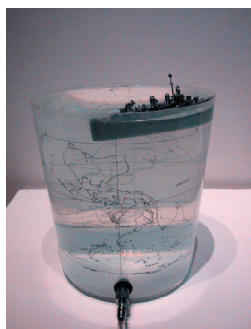
問題はギャラリーからインターネットに接続する学内LANであった。ラチャパット・インスティテュートはコンピューターセンターを持ちコンピューター関連の学部も有しているが、美術学部のギャラリーには学内LANが接続されていないことが確認できたのは会期1ヶ月前であった。コンピューターセンターからギャラリーまでを無線LANで接続することも検討したが、距離が500mほどあるためかなり大型の装置が必要となること、日本からの通信関連機器の持ち込みにも問題があることなどから学内LANへの接続はあきらめざるを得なかった。電話回線を使つてのモデム接続も検討したが、長時間接続による料金の問題、タイのプロバイダーとの契約等あまりにも障害が多く、ギャラリーの作品とインターネット上での参加者は繋がることなく、プロジェクトは終了した。

まとめ

これらの作品は、いずれもその場所の持つ特性から導き出されたものである。特に芝山野外アート展'99に

題名 「wwwater」
 大きさ: h 80cm × w 300 × d50
 会場: Susan Dust Gallery in Thailand

素材: 水、プラスチック、魚、ビニールホース、プラモデル、ステンレス等
 展覧会期間: 2002年8月9日〜8月31日



においては自分が今住んでいる日常の場所の問題が作品として関係してくることで、日常と芸術の問題についてストレートに考えることができ、美術館の中での鑑賞だけを目的とした作品より、自分と作品とそれが置かれる空間が相互補完的に機能し、リアリティを持って制作にあたることができた。

「木の造形ワークショップ」による共同作品においては、ワークショップという形式を採ることで、作者ひとりの発想だけで作品が完結するのではなく、多くの人が作品に関わることで生まれるイメージを受け入れながら制作することができた。またこの町の人々の多くは木を糧として生活してきた歴史があり、そのことが今回の作品の素材に木を選択させた。設置場所が森に近かったことが、そこに住む動物を意識することになり、作品のテーマや形態の決定につながった。

タイでのプロジェクトは、当初の計画のどおり完了することはできなかった。しかし作品が展示される場所が海外ということで生じた、運搬上の問題や国と国を強く意識させられる状況が、作品のテーマを決定し、世界の人達がどこからでも参加できるインターネットを取り込んだ作品を計画する契機となった。

後の2例は、場所の問題に加え、普段美術に関わっていない人達が作品の制作に参加する内容となっている。このことは、とかく難解であると思われ、敬遠されがちな現代美術の作品を身近なものとして捉える機会ともなっている。

これらのケースでは、場所の特性が今まで視野に入れていなかった諸要素に対し作者の視点を広げ、新たな創造の可能性を引き出す原動力となりえたのである。

I T 革命がもたらしたネットワーク社会の到来により、我々は居ながらにして世界を疑似体験することができる。しかしそれと同時に、世界の均質化はますます加速し、それは創造の領域においても例外ではない。このような時代にあって、現実の場所の持つアイデンティティは、表現におけるイメージネーションの源泉として最も重要な要素となるのではないか。

【参考資料】芝山野外アート展 '99- かかわりの原景(記録集)

ivisit ホームページ <http://www.ivisit.com/>

夏池篤 ホームページ <http://www.bj.wakwak.com/~natsu/>

【芝山野外アート展 '99 期間】1999 年 5 月 2 日～30 日【出品者】青野文昭・飯田啓子・内山寿峰・エサシトモコ・大川和宏・勝田徳朗・門倉光正・金澤安宏・木村恭子・酒井清一・柴田美千里・下村豊・庄司恵・鈴木洋子・曾根光子・武内カズノリ・辻忍・寺田眞信・夏池篤・

西岡泰・根岸達江・野村俊幸・原田暁・古川泰之・村橋章江・森谷志保子・山根勇・吉田佑子

【主催】芝山アート展実行委員会【共催】芝山町・芝山町教育委員会・芝山ミュージアム

【木の造形ワークショップ期間】2000 年 8 月 27,9 月 3 日【参加者】延べ約 40 名【展覧会期間】2002 年 9 月 3 日～9 月 17 日

【主催】天竜市文化協会 【協力】天竜市教育委員会・天竜林業高校・ゴコー製材・秋葉産業・中谷多加治・天竜森林組合・常葉学園

【The Faculty of Art & Design of Tokoha Gakuen Univ.Exhibition in Thailand 期間】2002 年 8 月 9 日～8 月 31 日【参加者】安部一博、赤堀マサシ、浜西勝則、飯塚直司、今井瑾郎、伊藤繁特、加藤之敏、栗田仁、神津宏昭、三田村シュン右、松野崇、中山ヤスコ、長岡宏、夏池篤、坂田和之、櫻井孝美、島村芳三、田宮話子、土屋和男、上田靖之